

【書評】

富永一登著『中國古小説の展開』

(研文出版、二〇一三年)

佐野 誠子

詩文研究に比し、六朝・唐代の小説と呼ばれる作品群^①に關する日本語の研究書は壓倒的に少ない。長く讀まれ續けてゐる唐代小説全般を扱った研究書としては、内山知也『隋唐小説研究』(木耳社、一九七七)、近藤春男『唐代小説の研究』(笠間書院、一九七八)があげられよう。これら二書は、基礎研究と呼ぶべき書籍であり、内山著は、隋代を含めた唐代小説の歴史的な展開を作者・作品毎に追ひ、近藤著は、形式面の問題の検討を含みつつ、愛情、狹義、神怪、歴史とジャンル別に特徴を探っている。その他、岡本不二明は『唐宋の小説と社會』(汲古書院、二〇〇三)、『唐宋傳奇戲劇考』(汲古書院、二〇一一)、『李娃傳と鞭』(汲古書院、二〇一五)で、宋代以降への文學史的な展開を見据えて唐代傳奇小説を論じている。また、數篇の傳奇小説のみを扱ったものであるが小南一郎『唐代傳奇小説論』(岩波書店、二〇一三)は、傳奇小説の成立と限界について論じる際には無視できない

重要な著作である。

六朝及び唐代の小説を扱った比重が大きい書としては、前野直彬『中國小説史考』(秋山書店、一九七五)、内田道夫『中國小説研究』(評論社、一九七七)、莊司格一『中國中世の說話—古小説の世界』(白帝社、一九九二)、竹田晃『中國小説史入門』(岩波書店、二〇〇二)などをあげることができる。

翻譯に關しては、平凡社中國古典文學全集や東洋文庫、明治書院『中國古典小説選』、さらには岩波文庫にも『唐代傳奇集』があるなど、けつして少ないわけではない六朝・唐代の小説であるが、研究書に就いては、このように寥々たる狀況である。

富永一登著『中國古小説の展開』は、著者の六朝・唐代小説に關する論文を集めたものである。ここに、ようやく研究書レベルでの中國古小説研究の「展開」がみられることとなった。

なお、本書については、溝部良恵による傳奇小説部分を中心とした書評が、『新しい漢字漢文教育』五九、二〇一四に掲載されている。

目次は以下のようなものである。

序 章 想像世界へのいざない

第一章 古小説のテキスト

『太平廣記』の諸本 付表『太平廣記』の來歴と諸本／
魯迅輯『古小説鈎沈』

第二章 「小説」觀

六朝「小説」考—殷藝『小説』を中心として／唐代「小説」考—顧況「戴氏『廣異記』序」を中心として

第三章 六朝志怪論考

六朝志怪書解題／六朝志怪の「鬼」／六朝志怪の文體—『異苑』を中心として

第四章

六朝志怪から唐代傳奇へ—異類婚を中心として
「人虎傳」の系譜—六朝化虎譚から唐傳奇小説へ／「袁氏傳」—猿の變身／狐說話の展開／「白蛇傳」—遡源考／「柳毅傳」—龍說話の展開

第五章 唐代傳奇論考

沈亞之の史傳的作品／唐代小説の「鬼」—『太平廣記』鬼類を中心として／商胡買寶譚／「鶯鶯傳」—愛情小説の限界／「魚服記」の創作意圖—唐代傳奇的娛樂性／唐代小説の創作意圖—「杜子春」を中心として

結 章 「桃花源」と「和神國」

初出一覽／付録 古小説關係著書／あとがき／索引

序章においては、「小説」の語の使われ方、六朝から唐代への小説の變化について、そしてその變化は、想像力と言語表現の巧みさによつてもたらされたもの（二六頁）だとの概論が述べられる。

六朝から唐代への小説の「展開」をみようとする場合には、各種志怪・傳奇的テキストをみるだけでは不十分である。北宋・李昉等編

『太平廣記』と魯迅『古小説鉤沈』は必携の書である。『太平廣記』は、北宋太平興國三年（九七八）に太宗に上表された類書であり、六朝志怪及び唐代の志怪・傳奇からの引用文を多くおさめる。また『古小説鉤沈』は、單行本が現存しない六朝志怪の輯本である。

そのため、本書の第一章「古小説のテキスト」は、この二書についてのテキスト研究の概説を行つてゐる。これまで『太平廣記』に関する概説がここまで詳しく書かれた日本語の書籍はなく、古小説研究をしようという者にとつて本章は必讀の文獻となろう。ただ、『太平廣記』をめぐる研究については、章末でも初出の論文公刊後にでた論文・書籍の出版情報の補足があるが、更に本書の出版前後に大きな變化があつた。著者は、本文中で一般に『太平廣記』が完成後すぐには印刷されず、版本が出回つたのは明代になつてからという通説を紹介したのちに、北宋における流布の可能性を蘇軾の文などにたどつてゐる。このような『太平廣記』受容研究は、西尾和子によつて現在精力的に進められている。そして、二〇一一年には、張國風の校訂による『太平廣記會校』（北京燕山出版社）が出版された。『太平廣記會校』は、これまでよく使われていた中華書局版では参照していなかつた『太平廣記』の諸本、さらには、朝鮮半島で出版されていた『太平廣記詳節』³という、『太平廣記』のダイジェスト版までも校勘の材料として用いたものであり、中華書局版に比して詳細な校注が附されている。このことについても著者は、章末の後記でふれ、のちの章においても一部注釋で『太平廣記會校』を利用してゐるが、全面的に取り入

れることが時間的にかなわなかったことは、残念である。

評者は、『太平廣記會校』本を用いたときに、その校訂や、句讀の切りに對して同意できない場合もあり、必要に応じて古い中華書局版も参照することがある。『太平廣記會校』によって、よりよい校訂のテキストが出版されたとしても、『太平廣記』の編集自體が、それほど精密に行われていないという事實は覆らず、研究の際には、改めてのテキストの吟味が必要となる。

このことは、『古小説鉤沈』に關しても同様である。著者は、『古小説鉤沈』に關して、研究史、魯迅による輯佚作業の時期、序文及び魯迅の古小説に關する言及をまとめた上で、『古小説鉤沈』のテキスト上の問題點を整理する。著者は、『魯迅輯『古小説鉤沈』校釋——『列異傳』』（廣島大學文學部紀要）五四卷特輯號二、一九九四）の末尾で、『魯迅所見の『太平御覽』は、『南海李氏據鮑崇城校本重刊光緒十八年版歸學海堂』本と一致していることに氣づいた」（九〇頁）と報告している。魯迅が見た本と我々が今入手しやすい本とは違い、それがテキストの違いにつながる。簡単にいってしまえば、『古小説鉤沈』は、單行本として存在しない六朝志怪の輯本としては一覽性にすぐれるが、そのテキストは、單に話の内容を知るだけでなく、詳しく讀み解こうとする場合には、各自で引用元のテキストにあたらなくてはいけないのである。著者は、前野直彬の語を引いて、『古小説鉤沈』の決定版テキストを作るべきだと強調する（六四頁）ばかりでなく、實踐もしており、先にあげた『列異傳』のみならず、祖臺之『志怪』

や『幽明錄』の新たな校訂についても行っている。

第二章「小説」觀は、『小説』という語に焦點をあてた論考二篇を收録する。序章でもあったように「小説」の語の古い用例を紹介したのち、その名も『小説』という梁の殷芸が編纂した書籍についての分析が行われる。『小説』の内容について、事物の由來、『世說新語』的な人びとの間の噂話と、鬼神の話の三種類で成り立っていると看做す。そして、『隋志』で、志怪が史部雜傳類に分類されているのとは違い、殷芸は既に志怪小説を小説として意識していた、と結論する。

その次に、唐代戴孚の手になる怪異譚集『廣異記』につけられた顧況の序文の詳細な解説がある。これは、戴孚の死後、息子達が時の著名文人顧況に依頼して書いてもらったというものである。顧況自身は、このような作品を書いたわけではない。しかし、顧況は怪異を語ることの意義について述べた上で、歴代の怪異を記録してきた書物の歴史を概観する。當時の人達からみた怪異譚がいかなる位置づけであったのかをうかがえる貴重な文章となつてゐる。著者は、この序文中に「志怪」の語はみえるが、「小説」の語はみえない、と指摘する。そして、志怪と小説が一緒に語られるのは、段成式の筆記『酉陽雜俎』の序文になつてからだとする。

この章で、また序章においてもそうであったが、著者は、現代の目からみた「小説」觀を六朝・唐代にさがそうとしている印象を受ける。ことばの意味は時代によつて變化する。その意味で、もう一段ひいた目で「小説」について考える必要があつたのではないだろうか。ひる

がえって、日本での「小説」の語の使われてきた歴史について、『日本國語大辭典』（小學館）によつて調べてみたところ、著者も序章で述べている坪内逍遙『小説神髓』が novel の譯語であつた以前においても、日本語文獻で「小説」の語は使われていた。そして、その意味は『日本國語大辭典』の説明を利用すれば、「民間に傳わる話や市中の話題を記述した、散文體の文章。正式の、改まった文章でないもの。中國の稗史（はいし）から出たもので、ふつうはある程度史實に基づいた話をさす、あたかも史實のように見せかけた虚構の話をさすこともある」とあり、『聖德太子傳曆』（九一七頃か）や『史記抄』（一四七七）などの用例を擧げる。『史記抄』では、吳太伯世家において「越より范蠡が計で西施を吳王に獻じた」と云事は小説にはあれども史記并通鑑等には無明文ぞ、と歴史の逸話を「小説」と呼んでいる。この使われ方は、『漢書』藝文志における「小説」と共通したものであらう。

志怪が歴史記録から派生した、あるいは、歴史そのものでもあつたことは、誰も否定しないであらう。また『世說新語』のような作品も實在の人物についての逸事であり、それがとるに足らないものであり、また語らいの中から生まれてきたからこそ「小説」と呼ばれた。そうになると、志怪も、また傳奇も、唐代以降に小説として認識されたとしても、それは、志怪Ⅱ小説ではなく、小説（史實よりだが、とるにたらない話）という大きなジャンルの下に志怪や、世事、博物という下位分類があつたと考えるべきではないだらうか。そうすれば、殷芸の書が『小説』という題を有することについても、また、怪異譚のみを

載せる『廣異記』の序において、とりたてて「小説」の語を使わなかつたことも、また、ありとあらゆる情報を集め込んだ『西陽雜俎』が、志怪・小説の語を使つたことも、合理的に理解できる。

第三章は「六朝志怪論考」として、各志怪についての解題、六朝志怪の「鬼」、そして、志怪の文體の例として、劉宋・劉敬叔の『異苑』がとりあげられている。解題については、中國語では各種専門書籍や事典において、解題があり、また、日本語の譯書などでも簡単な解説があるが、このように一つにまとまつているものは便利ではある。ただし、單行本がある任昉『述異記』、古小説鈎沈でも收録條數が多い祖冲之『述異記』や王琰『冥祥記』が含まれておらず、主要な書籍が網羅されているわけではない。

『異苑』の文體分析は、六朝志怪研究において文章を問題とする場合の困難を明らかにする結果となつている。著者は、『異苑』の話の多くが『搜神記』など他書からの引用でなりたつてゐることを指摘する。また、現行十卷本の『異苑』は、明代の再編集本である。そのため、どの話が『異苑』の著者である劉敬叔本人の文章であるのかを見極めるのは難しい。『異苑』卷六の「山靈」の話について、著者は、宋の孝建年間（四五四—四五六）のできことであることから、「時間的に他書からの傳寫は不可能と思われ、恐らく劉敬叔自身によつてはじめて文字化された、所謂口承故事であらう」（一八九頁）として、興奮した口調をそのままに傳える表現は劉敬叔によるものとする。しかし、この話は、他書に『異苑』からとしての引用がなく、同話であ

る『太平廣記』卷三百二十五「郭慶之」は出典を『述異記』とする。

これは、本當に原本『異苑』に收められていた話なのだろうか。著者も、『異苑』と『幽明錄』との重複について、全十六話中十三話が、類書では『幽明錄』からとしてみ引用することから、『異苑』が再編された時に混入した可能性を指摘している（二八六—二八七頁）が、これと同じく混入話なのではないだろうか。『太平廣記會校』は、『太平廣記』のこのテキストと現行『異苑』との間の文字の違いをいくつか指摘している。そのため、この話が、十卷本の出版者である明の胡震亨が発見したという宋本『異苑』に入っていた可能性もあるかもしれないが、慎重に議論を進めなければならないだろう。

また、『異苑』巻一にある山水の描寫が美文であることについて、著者は、當時の地方志や山水記の文章をそのままに利用したのかもしれないと指摘する。しかし、そこから、現在他書に類似内容がみえない『異苑』中の美文について、劉敬叔自身がしるしたものかもしれない、との推測をする（一九三頁）のは、些か無理のある議論ではないだろうか。六朝の文章には失われてしまったものが多数ある。その中で、すでに我々が参照できないテキストを劉敬叔が『異苑』に取り込んだと考える方が自然ではないだろうか。

その他、現行『異苑』の本文よりも長い文章が、日本に残されている例もある。類書からの再編本は、類書引用時に削り取られてしまっている部分がある可能性が高く、文章表現から意圖を探るのには限界がある。

それよりも、六朝志怪については、書籍毎の内容の傾向の差などから、著作の意圖をさぐる方が着實なのではないだろうか。『異苑』における特徴は、現行十卷本卷三に博物的な記述を多く含むこと、また卷四を中心として、五行志に通じるような死の予兆を多く含む話が多いことなどである。六朝志怪は、『宣驗記』や『冥祥記』などの佛教志怪という佛教に特化した著作があるだけでなく、著作毎の傾向を分析すると、怪異を共通の内容としながらも、それぞれに關心の領域にずれがあることがわかる。

第四章「六朝志怪から唐代傳奇へ——異類婚を中心として」では、虎、猿、狐、蛇、龍についての異類婚姻譚を中心に、それぞれ分析を行っている。實は、このほかに第三章及び第五章で、六朝及び唐代の「鬼」（幽霊）についての話を扱った節がある。「鬼」の題材もこの章に入れたよかったのではないだろうか。動物と「鬼」の論文とは、共通點が多いからである。第一に、どちらとも、それぞれの異類に關する話は『太平廣記』の分類によつて概観している。第二に、動物にしろ、「鬼」にしろ、ヒトではない他者（異類）という點では同じである。第三に「鬼」の論文についても、幽婚譚を扱う比重が大きく、また、第四章の章題には、「異類姻」があげられるが、各篇には、それぞれの動物の全般の話についての言及もある。「鬼」の論文のみ、分量が膨大なこともあつてか、六朝と唐代とが別々となつてゐるが、それを除けばこのように論文の方法論は共通している。この「鬼」の論文二篇も第四章に入れた上で、六朝・唐代の小説にとつて「異類」とはどのような

なものであったのか、また、異類毎の傾向の差はどのようになってゐるのか、などについての總括的な文章がある方が、より適切な構成だったのではないだろうか。

本章で主に行われていることは、六朝と唐代の同一題材を比較しての描寫の詳細化の指摘であり、文藝化という説明がされている。ただ、嚴密に考えれば、それだけをもつて小説の「展開（順を追つての發達）」とすることは許されないかもしれない。たとえば、芥川龍之介や、中島敦らが唐代小説に取材して小説を書いている。ここには彼らなりの創作の工夫がある、しかし、唐代傳奇から、大正・昭和の小説に「展開」したとはならない。六朝から唐代へと時代的連續があるために、「展開」となってしまうのかもしれないが、本當にそうであるかについては、このような議論だけでは不足なのではないだろうか。¹⁰⁾

六朝と唐代の小説の大きな違いは、描寫の詳細さのみにあるのではなく、主題の有無にある。異類婚姻であれば、異類との遭遇の事實のみがしるされた六朝志怪にくらべ、唐代においては、愛情が描かれること、著者の指摘する通りである。唐代の異類婚姻譚の傑作とみなされる話においては、異類は人格をもつたものとして描かれている。これは逆に考えれば、清・蒲松齡『聊齋志異』のように、ヒトを異類におきかえつつ、異類の特徴を生かした話を作ったともいえる。

主題の存在は、他の唐代傳奇小説においても同様である。そして、主題を描こうとする際に、六朝に蓄積があつた怪異譚を利用するしかなかったのが、唐代、とりわけ初唐時期だったのではないだろうか。

本書では簡単な言及があるのみだが、唐初の「補江總白猿傳」は、歐陽詢のサル顔をからかうために、サルが女をさらつた話を利用してゐる。また、中唐になつても、「任氏傳」はキツネとの異類婚姻を通じて愛情を描こうとした。このときに、すぐにはヒト同士の戀愛を描くことができなかったということなのではないだろうか。そして第五章では、後述するように、元稹「鶯鶯傳」において異類を女性に置き換えての表現を試みたことが論じられている。

主題があるというのは、陶淵明「桃花源記」が、六朝志怪の中にあつて、特別扱いされていることとも通じる。人々は、「桃花源記」に、ただの事實の記録ではない意圖を容易に察することができたために、一般の志怪と同列に扱わないのである。

そのときに考えるべき課題は、このような意圖をもつての著述が六朝にはほとんどなく、唐代になるとなぜ可能になつたのかという背景についての分析である。このような問題について、本書では第五章において語りの場や、溫卷（行卷）などについて簡単に觸れるが、本格的には論じておらず、他書を参照する必要がある。

芥川龍之介や中島敦にとつて、唐代傳奇は數ある創作の材料の一つでしかなかった。これは、明清の戯曲小説で、六朝志怪や唐代傳奇に題材を求めるのと同様である。それに對して、唐代の小説の多くは、六朝志怪なくしては、飛躍を得られなかった。著者は、そのようなことを所々ではのめかしながらも、強くは主張していないが、これこそが「展開」なのであろう。

第五章は「唐代傳奇論考」として、傳奇小説に關する論文六篇をおさめる。「鬼」に關する節については先に簡単に觸れたので、それ以外の論文について紹介していきたい。

「沈亞之の史傳的作品」は、韓愈の弟子にあたる沈亞之の「李紳傳」「馮燕傳」「郭常傳」「喜子傳」をとりあげ分析する。沈亞之は、韓愈・柳宗元の系譜につらなる史傳的な作品と、元稹・白居易集團の中から生み出された傳奇的な作品との兩方を著したという意味で、特異な著者である。そして、それは制作時期が、前者は任官前、後者は任官後であり、史才を示すことによつて名を知られようとするための史傳と、仲間内の語らいの中で生まれた傳奇であると説明される。また、沈亞之の傳奇的な作品三篇は、いずれも夢に關するものである。この三篇が、あとになればなるほど、志怪から離脱していくという指摘は、内山著の流れを引くものであるが、これこそが前章における、志怪から傳奇へと離脱の様相を示していることとなる。

「商胡賈實譚」については、唐代小説において、西方からきた胡人達が、國際的な彩りを添えたことが述べられるが、著者も利用する石田幹之助『長安の春』（平凡社東洋文庫、一九六七）におさめられる話の紹介で終わっており、やや新味にかける。著者も紹介するように、六朝にも胡人の話はあるが、唐代において量的な擴大がみられるのは、實際に多くの胡人が來ていたからである。このように、時代・環境の變化によつて、新たな話の題材が加わるのは當然である。その先の、新たな題材である胡人達にどのような役割が附されていたのかを考え

るべきではないだろうか。たとえば、彼らは異人ではあるが、第四章のような異類としては扱われてはいない。

「鶯鶯傳」——愛情小説の限界」は、「鶯鶯傳」の現在の讀者からみた小説としてのあらずじの不備を指摘する。それは、異類としての女を書こうとした故であるとする。そして「鶯鶯傳」が、不備があろうと、現在まで愛讀されているのは、著者が指摘するように、元稹の唐詩の手法を加味した怨情描寫の巧みさのためであらう。

靜永健が陳鴻「長恨傳」と白居易「長恨歌」を比較して、「長恨歌」が物語の構成をよく整えていると評價したように^①、我々は作品を評價する際には、内容ではなく、また主題でもなく、その表現や構成にこそ踏み込むべきなのである。

末尾の二篇は、「創作意圖」という語を用いて、「魚服記」及び「杜子春傳」を論じている。「魚服記」の創作意圖は、それまでの魚への變身譚にあつた冥界遊行の要素を棄てて、魚に變身しても官僚意識を持ち続けるさまを「奇事」として描き、娛樂性を高めたところにあるのだという。「杜子春」については、それぞれの場面に「奇」な工夫がこらされているとする。これは「杜子春」が收められる『玄怪錄』及び『續玄怪錄』（兩方に收められる）に共通した、「ある特定の主義主張に基づくものではなく、如何にして奇怪な話を作り、讀者を驚かせ樂しませるかという諧謔性の追求に意を注いだもの」（四七八頁）だとする。

そして、これらのような「奇」の追求は、酒令の場になされたもの

であり、著者である中下層官僚の状況から、諧謔的なものが好まれたことが反映されているためだとする。

第五章でとりあげた作品は、唐代傳奇小説の一部にすぎず、他の作品についても幅廣く吟味すべき課題はあるだろう。

著者は、以上のように、六朝から唐代への小説の「展開」を論じ、とくに唐代における「創作」の工夫を明らかにした。しかし、唐代小説のすべてが六朝小説を展開させただけだったのか。著者も時折、中晩唐以降における小説の怪異への回歸に觸れる。實際に、とりわけ元白集團における傳奇小説は、あらずじについては、戯曲化など受容されたが、表現としてその後新しい形への昇華はなかったように思える。いわば、傳奇小説は、ある方向に伸びた一本の枝であり、その枝は成長が止まってしまったのではないだろうか。そして、すでに太い幹であった小説（逸話や怪異、博物を含む）は引き續き上に伸びていった。

實際、宋代にも傳奇小説のたぐいはあるものの、北宋・樂史「楊太眞外傳」のように歴史家による實在の人物に關する史傳體小説が主であり、成果に乏しい。そして、怪異譚で目立つのは、南宋・洪邁が、親戚知人から怪異譚を集めて編纂した「夷堅志」であり、その他は、怪異譚のみに限らない筆記が多勢を占める。筆記の中の怪異譚は、唐代の志怪以上に著者の見聞をしるしたという色合いが強い。

唐代傳奇の傑作の多くが、志怪を展開させた上で作品としての完成度（後世の讀者に受け入れられるだけの表現）を得ていたとしても、その路線は、棄却されてしまったともいえる。近體詩と同じくあまり

にも完成されてしまったが故に、新しいものができなかったのだろうか、それとも他の要因があるのだろうか。

それは、元白集團にあった私小説的な語りへの拒絶だったのかもしれないし、中國文人の意圖的な「創作」への拒絶だったのかもしれない。「沈亞之の史傳的な文章」でとりあげられたような、身近な人物を取り上げた「○○傳」は、後代にも多く書かれており、文章家としての面目を發揮するためのものであった。この現象は、宋代における小説の状況と同じく、史實・事實への回歸といえよう。

はじめに述べたように、六朝志怪を取り扱った書は少ない。本書は、ときおり、六朝志怪に關する特徴や肯定的な言説をあらわすこともあるものの、全體的には、傳奇小説の表現を稱揚し、その踏み臺として「だけ」の六朝志怪という印象を與えるきらいがある。著者の關心は、志怪自體よりも唐代小説につながるものとしての志怪であるともいえる。

六朝志怪の内容は、それ以前の書籍にさかのぼれるものもあれば、六朝志怪から特徴的に目立つものもある。第三章にある「六朝志怪の「鬼」」において、六朝以前の鬼の記録は怨靈的なものが主であること、そして、六朝志怪の鬼の話を「豊か」にしたのは、冥界、佛教、道教の關係であるとする。冥界は古くから存在するものの、佛教、道教は、後漢末から六朝にかけて廣まったものであり、それ以前にはそもそも佛教や道教に關する話自體が存在しない。

六朝志怪は、史の文體を利用して（これは、傳奇の前に志怪が必要

であったのと同様に、志怪には史の文體が必要であったということである）、これまでになかった、身近な怪異事件をしるすことこそが特徴である。その背景の一つには、佛教や道教のような新しい宗教の勃興も関係していたであろうが、何もかもを貪欲に記録しようという歴史の意識の變化もあった。そして、その意識は、傳奇小説のような細やかな描寫はないにしても、知りうる限りの情報を残そうとするあまりの、一種の不安定さをもった、また理由がわからなければわからないままにしておくという獨特の文體を生み出すこととなった。このようにして、志怪は、正史の五行志にあるような事實の羅列ではない、話としての流れをしるす記法を作り上げたことで、現在の我々も讀んで特異な魅力を感じることとなっている。これこそが六朝志怪が中國小説史のはじまりとして認知される所以であろう。志怪は志怪で、過去になかったものを作り出しており、それは、充分に文學史的な價值がある。

本書は、これまでの著者・著作別の基礎研究に加え、六朝及び唐代を同一題材で比較する場合の基礎的な研究を提供したことが評價できよう。また、現在オンラインで論文検索をする環境の中、データベースに収録されていないために存在に氣が付きにくい古典的な研究が本文や注で多数引用されているのも、初學者にとっては参考となるだろう（ただし、注では、初出の雑誌情報のみをあげ、その後單行本に入られている情報が入っていないことが多いのには注意する必要がある）。そのついでにいえば、末尾に附されている「古小説關係著書」

については、眞に必要であったのか否か判断が難しい。現在ウェブ上でキーワードを入力しさえすれば、新しい論文や書籍の情報を簡単に得ることができる。そこに、舊來のような一覽を作るのは、勞多くして益少ななことかもしれない。今、必要とされるのは、網羅性を目指した一覽よりも、質を見極めた上での解説を附した書籍・論文案内ではないだろうか。

索引は、書名、人名で別となっており、特に書名は、卷數・小題も附されて配列されていることで、たとえば『太平廣記』のある卷に收められている話が言及されているか否かなどが簡単に調べることができ、便利である。

注

- (1) 「小説」の語については、本文で後述するように著者も書籍中で検討している。評者は積極的に「小説」の語を使わない立場であるが、本書評では、書名にしたがい「小説」の語を用いる。
- (2) 西尾和子「南宋期における『太平廣記』受容の擴大要因について」『日本中國學會報』六六、二〇一四の他、「和漢語文研究」に四篇の論文が掲載されている（二〇一五年秋時點）。
- (3) 『太平廣記詳節』については、溝部良恵「成任編刊『太平廣記詳節』について」『東京大學中國語中國文學研究室紀要』五、二〇〇二、張國風『太平廣記版本考述』（中華書局、二〇〇四）などを参照。
- (4) 前野直彬「魯迅『古小説鈞沈』の問題點」のもの。著書では初出の『東洋文化』四一、一九六六をあげるが、現在は同氏『中國小説史考』

(秋山書店、一九七五)に収録される。

- (5) 『魯迅輯「古小説鉤沈」校釋—祖臺之「志怪」—』『廣島大學文學部紀要』五三、一九九三、『魯迅輯「古小説鉤沈」校釋—祖臺之「志怪」(續)』『中國學研究論集』八、二〇〇一。『魯迅輯「古小説鉤沈」校釋—幽明錄』は、『中國學研究論集』九號(二〇〇二)から二〇號及び二二號(二〇〇九)まで全十三回にわたって掲載されているが、第八三話までであり、その後中断しているようである。

- (6) 『漢書藝文志』の諸子略小説家の書籍から、當時の「小説」の語を分析したものとして、前野直彬『漢代の小説について』注(4)前掲前野著所収がある。

- (7) 著者も注で引用しているように『西陽雜俎』序文の「志怪小説」の語については、黒田眞美子『唐代における「小説」の變容について』『お茶の水女子大學中國文學會報』七、一九八八が、現在もちいられる「志怪小説」の意味ではなく「志怪」と「小説」が並列であろうとの見解を述べている。この場合、本文中で評者が、志怪は小説の下位分類として扱われるようになったのではないかと論じたことと矛盾するように思われるかもしれないが、怪異のみを取り扱った書を「志怪」、怪異譚もその他の話も収める書を「小説」と呼んだ(それこそ殷芸『小説』のような)のだとすれば、おかしくないだろう。

- (8) 『異苑』各話の重複状況については、本書でもまとめられているが(二八四—二八六頁)、類書の引用状況まで網羅した大橋由治『類書等所引「異苑」鉤沈』『大東文化大學中國學論集』一四、一九九六が参照するのに便利である。

- (9) 谷口孝介『菅原道眞と神仙思想—源能有五十賀屏風詩をめぐって—』『菅原道眞の詩と學問』塙書房、二〇〇四、初出一九八八)では、菅原道眞「源能有五十賀屏風詩」につけられた紀長谷雄の抄に『異苑』が引用されることを紹介する。この引用文は、現行十卷本『異苑』巻五第二八話に収められている同じ話よりも文章が長い。

- (10) 志怪から傳奇へという小説史のとらえかたは、魯迅『中國小説史略』によって提示された枠組みがまだ生きているということでもある。廣

瀬玲子『小説と歴史—魯迅『中國小説史略』試論—』『東洋文化研究所紀要』一三三、一九九七は、そのことについて批判的な検討を加えている。

- (11) 靜永健『教材としての「長恨歌」論』田部井文雄編『漢文教育の諸相—研究と教育の視座から—』(大修館書店、二〇〇五)所収。